

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 9 日現在

機関番号：17301

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24617009

研究課題名(和文) 海外に興味を持たせ国際化推進を支援する教育方法の提案

研究課題名(英文) A suggestion on how to foster internationalization of university students by increasing more interests in the global society

研究代表者

古村 由美子 (FURUMURA, Yumiko)

長崎大学・経済学部・教授

研究者番号：30336036

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,300,000円

研究成果の概要(和文)：現在のグローバル社会において、内向き志向といわれる学生に海外に興味をもたせることを目的とした授業方法を構築した。実際に留学した学生へインタビューを行い、何故彼らが留学したのか、また各自の経験内容についての調査を行うと同時に、留学したくない学生へもその理由についての調査を行った。その後、フォーラムサイトを作成し、日本人の学生と外国人学生の交流を行う授業を行った。授業前後に日本と交流相手国についての認識がどのように変化したかの調査を行い、サイト上での交流が学生の外国に関する興味に影響を与えたことを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：The purpose of the study is to explore what type of education in foreign language learning would develop language learners' curiosities about foreign countries in growing globalization and internationalization of the world. The reason why students studied abroad and why others didn't were investigated by interviews and questionnaires. The forum site has been established to make Japanese students with foreign students in the course. Changes of students' recognition of Japan and their partners' countries were found. It was also clarified that this interaction on the forum site has raised many students' curiosity about foreign countries.

研究分野：異文化間コミュニケーション学

キーワード：国際化 英語教育 コミュニケーション力 異文化教育

1. 研究開始当初の背景

代表者は、これまでの英語教育経験において英語学習が好きな日本人学生は多くはなく、また実際に日本国内では日常的に英語を使用する場面はほとんどなく、国外の事象にふれる機会もあまりないため、学生が英語を使用したいと強く動機づけられ、また国際社会に興味をもつ環境は整っていないと感じていた。このままの状況が続けば、日本は国際社会の中で取り残されるのではないかと、と危惧する声をメディアを通して耳にしていた。国際的な共通語として英語が使用されている現実を踏まえ、英語教育の中で海外に関する興味を培うことができる教育方法を考えることとした。

そこで、まず実際に留学した学生へインタビューを行い、何故彼らが海外に興味をもち、留学したいと感じ、実際に留学したのか、また各自の経験内容についての調査を行うと同時に、留学したくない学生へもその理由についての調査を行った。インタビューの結果では、留学した学生の中には、小学生や中学生の時に両親や、まわりの人々の影響で興味を感じるようになった学生が多いことがわかった。そこで、大学生では少し遅いのかも知れないが、学生に海外の国、文化や人々に興味を持たせる機会を与えることを目的として、海外の学生と交流できるフォーラムサイトを設営することを企画した。海外の事象への興味を喚起し、英語の有用性を実感するには、実際に海外の学生と英語を使用して交流することが有効だと考えた。交流のためには英語力だけではなく、自分の考えを説明し、相手を理解しようとする能力や、相互に意見を述べあい、さらに自分を省みる能力も必要であることを実際に体験する機会を与えるため、本研究1年目には中国の大学生、日本の大学に滞在している留学生と交流する計画を始めた。

2. 研究の目的

大学審議会(2000年6月)では、「グローバル化時代において、ますます価値観が多様化する中で、世界中の様々な人々と共生し、地球社会の一員として活躍する人材には、その時代と活躍の舞台にふさわしい教養と専門的知識が必要である」と述べられている。しかしながら、2010年10月の文部科学省の発表によると、海外留学する日本人学生数は年々減少しており、若者の内向き志向等の影響が問題とされている。

こうした状況を背景として本研究では、学生に海外に関心を持たせ、国際社会で活躍できるよう Intercultural Communicative Competence(以降 ICC)を高めるための教育方法開発を目的とする。教育モデルを構築、改善、最適化を図り、教育方法を公開する。

3. 研究の方法

(1) 平成24年度

a. 前期には留学経験者へのインタビューを行い、海外へ興味を持ったきっかけ、留学先を選んだ理由、留学で学んだこと、困難を感じたこと、帰国後留学経験をどのように生かしているか、について尋ねた。また、他の学生群にアンケート調査を行い、留学したいかしたくないかを尋ね、それぞれの回答者にその理由を尋ねた。

b. 後期に動画フォーラムサイトを開設。参加学生の出身国は、日本、中国、韓国だったため、それぞれの国について自分の興味のあるテーマを選び、学生はグループで自ら調べてプレゼンテーションを行い、その動画をサイトへ掲載して外国人学生や留学生と意見交流を行った。また、他の学生のプレゼンテーションや Power Point file を見て、自分の意見を言い、相互交流を行った。学生は課題として Diary を2度、エッセイを1度書き、自分の体験について述べた。さらにフォーラムサイト活動の改善すべき点についても述べた。

(2) 平成25年度

a. 前期は前年度授業で得た学生からの感想や意見の分析を行い、フォーラムサイト活動の改良点について、研究分担者とも協議し、改良を加えた。

b. 後期にフォーラムサイト活動を実施。参加学生の出身国は、中国、台湾、日本であった。フォーラムサイト上での交流前後にはホフステッドの5つの文化次元の観点からの質問紙を利用し、学生の自文化や他文化についての認識の変化を測定した。交流期間中には学生に diary を書かせ、Byram(1997)の提唱する「知識、態度、技能、クリティカルな文化的気づき」から構成される ICC の観点から、変化を測定した。中国人学生から、フォーラムサイトの改善点について助言を受けた。

(3) 平成26年度

a. 前期は前年度の交流で得たデータの分析を行うと共に、フォーラムサイト活動。参加学生は、台湾の大学生、日本の大学生、日本に来ている留学生(ブラジル、インドネシア、スペイン、ニュージーランド、メキシコ、フィンランド、USA)であった。日本人学生には授業の前後で、外国への興味がどのように変化したかを調査し、Diary とエッセイで意見を書かせた。

b. 後期はこれまでの学生からの要望や使いづらさについての意見を基に、フォーラムサイトの改良を行った。フォーラムサイト活動は日本人大学生と台湾大学生との間で行い、Diary とエッセイで意見を書かせた。

現時点で作成した ICC 評価方法に基づき、研究分担者2名によって、26年度前期受講学生の内5名のサイトでの活動内容とエッセイを対象として、評価の試行を行った。

4. 研究成果

(1) 留学に関するアンケート調査

101名の大学生へ調査した結果、

留学したくない：61名

留学したい：38名

既に留学した：2名

A 留学したくない理由（複数回答）

経済的困難：70%

英語力の不足：38%

外国に興味を感じない：26%

外国は危険だと感じる：25%

就職活動が遅れる：21%

B 留学したい理由（複数回答）

英語力を高める：29%

その国の文化に興味がある：28%

自分の研究領域のことを調べる：18%

以前行ったことがある：11%

以上の結果より、学生に実際に英語を使用して交流を行うことによって、自信をつけること、実際に海外の学生と交流することによって、外国への興味を高めることの必要性が確認できた。

(2) 平成 24 年度後期にフォーラムサイト活動に参加した日本人学生 40 名は、本コースを受講後、外国への興味について下記のように回答した。

以前より興味が増した：80%

以前と同じ程度興味がある：17.5%

興味がない：2.5%

(3) 平成 25 年度後期にフォーラムサイト活動に参加した日本人学生 21 名の中国、台湾、日本についての認識の変化について調査するため、ホフステードの 5 つの文化次元の観点に関する質問紙 (Dorfman and Howell's, 1988) をコースの前後 2 回に実施し、その結果を比較した。

下記の 5 種の指標について 5 段階評価で調査した。

・「権力格差」：意思決定のスタイル

・「不確実性の回避」：あいまいさに対する寛容さがいいこと・指示書・規則の重要性

・「男性らしさ」：自己主張・競争・男性優位

・「集団主義」：集団の成功

・「儒教的価値観」：序列・倏約・根気強さ・恥

図 1 . 3 カ国について各指標に関する認識に変化があった学生の割合

N = 21 (男性 8 名・女性 13 名)



この結果から、参加学生の半数以上の学生が 3 カ国についての認識に変化があったことがわかった。

さらに、各国について 5 つの指標それぞれについてのコース前後での比較を行い、T 検定を行った。5 段階評価を使用し、1 は強く反対、5 は強く賛成という基準で評価を行った。

表 1 . 日本についての認識の変化 (N = 21)

指標	前	後	P
権力格差	2.52	2.54	.867
不確実性の回避	4.06	4.12	.623
男性らしさ	2.54	2.16	.003*
集団主義	3.82	4.17	.163
儒教的価値観	3.71	3.01	.0002**

・日本における「男らしさ」についての認識の変化は有意であった。学生からのコメントの例としては、「日本は男女格差をなくそうとする動きが多いが、まだ少し残っている感じがする。」

・日本における「儒教的価値観」についての認識の変化は有意であった。学生からのコメントの例としては、「日本では「上座」「下座」という考え方があり、目上の人に従う、という文化が根付いており共和を重んじる民族であるということがプレゼンテーションから分かったので、それまでの価値観が変わっていた。」

表 2 . 中国についての認識の変化 (N = 21)

指標	前	後	P 値
権力格差	3.64	3.47	.44
不確実性の回避	3.82	4.11	.087
男性らしさ	3.7	3.52	.399
集団主義	3.42	3.6	.358
儒教的価値観	3.6	3.89	.168

中国についての認識の変化にはどの指標にも有意差は観察されなかったが、下記のようなコメントが得られた。

・「権力格差」について：「今まで、中国は権力の差がすごくあって、きっと国民も私たちとは異なっているのだらうと思っていた。しかし、彼らのコメント等を見ても

と、日本人となんら変わりがなく、むしろプレゼンテーション等のやり方をみると結構自由なんだということが分かった。」

- ・「儒教的価値観」について：「指標に変化はあった。中国でも職場での地位の序列を重んじてそうで、部下はそれに従わなければいけないのかもしれない。耐えるということが求められるところなのだろうか。」

表3 .台湾についての認識の変化(N = 21)

指標	前	後	P
権力格差	2.96	2.98	.895
不確実性の回避	3.71	3.87	.208
男性らしさ	3.46	3.31	.471
集団主義	3.65	3.54	.543
儒教的価値観	3.64	3.71	.580

台湾についての認識の変化にもどの指標にも有意差は観察されなかったが、下記のようなコメントが得られた。

- ・「不確実性の回避」について：「台湾のことについてあまり知らない状態であったが、このサイトを使い始めたころの台湾学生のページで日本と台湾の従業員を比較していたものがあり興味を持ってコメントしたところ、意外と日本と考え方が似ていた印象を受けたから変わった。」

- ・「男性らしさ」について：「もともと男女の役割分離について台湾にあるとは思っていなかったが、フォーラムを見て男女平等は根強くあると思った。男性も女性も和気あいあいとしており、男性が優先して権限を持つ想像は全くなかった。」

(4) フォーラムサイトでの活動のメリット
学生の diary やエッセイの内容から、下記のメリットが確認された。

- ・自分が新たに、自文化について調査を行ったり、他の日本人学生や外国人学生の自文化についてのプレゼンテーションを見ることにより、通常意識していない自分の身の回りの出来事、過去に経験したことについて省察を行い、新たな認識を得たり、気づきを得ることができる。
- ・これまでよく知らなかった国についての情報を自ら調べたり、その国の学生たち自身のプレゼンテーションやコメントによって直接的にその国についての情報を得ることができる。

これらのメリットにより、フォーラムサイトでの活動を行うことで、日本人学生の外国に関する興味は高まる可能性が高いことが

本研究の結果から分かった。本教育方法により、交流対象国についてのステレオタイプやバイアスをより事実に近いイメージや認識へと変えることができ、さらに自文化について、より事実に近い情報を外国の学生へ発信することができ、学生自身も新たに得られた事実を再確認できた。

(5) Intercultural Communicative Competence (ICC) の評価方法

Byram(1997, 2008)の定義によると ICC は 1) Attitude、2) Knowledge、3) Skill of interpreting and relating、4) Skills of discovery and interaction、5) Critical cultural awareness の5項目の能力から構成されている。さらに各項目は複数の下位項目に分けて詳しく定義されている。ここでは紙面の都合上、評価方法について詳細に説明することはできないが、各下位項目を以下の5つの判定基準をもって、評価することを提案した。1) not observed、2) slightly observed、3) seemingly observed、4) roughly observed、5) perfectly observed。

本研究での研究分担者2名によって、5名の学生のフォーラムサイトでのプレゼンテーションとコメント、エッセイについて評価の試みを行った。2名の教育者それぞれの評価結果は一部分は同様の判定であったが、異なる判定結果も多くみられた。この評価の違いの原因については、さらに分析を行い、今後は一貫的な評価基準を策定するための研究を続けていく予定である。

引用文献

- Byram, M., *Teaching and Assessing Intercultural Communicative Competence*, 1997, Clevedon: Multilingual Matters.
- Byram, M., *From Foreign Language Education to Education for Intercultural Citizenship*, 2008, Clevedon: Multilingual Matters.
- Dorfman, P. W. & Howell, J. P., *Dimensions of National Culture and Effective Leadership Patterns: Hofstede Revisited*, In R. N. Farmer & E. G. McGoun (eds.), *Advances in International Comparative Management*, 1988, 127-149. Greenwich, CT: JAI Press.

5. 主な発表論文等

(雑誌論文)(計3件)

- Houghton, S.A., "Exploring manifestations of curiosity in study abroad as part of intercultural communicative competence", *System*, 査読有, 42C, 2014, pp. 368-382
DOI information: 10.1016/j.system.
古村由美子, 「フォーラムサイト上の交

流活動が学生の異文化に関する認識に与えた影響について」, 『第54回外国語教育メディア学会全国研究大会 発表要項集』, 査読無, 2014, 70-71

Nakano, H., “Writing and Presentation Using ‘Web-English’”, Conference Proceedings of ICT for Language Learning, 査読無, 2012, 185-188

〔学会発表〕(計15件)

Furumura, Y., “A suggestion on the approach to teaching ICC and EFL taken by non-native teachers”, 2nd International Symposium on Native-Speakerism, 2014.09.29, Saga University (佐賀県・佐賀市).

山田悦子, 「地域の伝統行事についての交流授業」, 留学生教育学会大会, 2014.08.08, 東北大学(宮城県・仙台市).

古村由美子, 「フォーラムサイト上の交流活動が学生の異文化に関する認識に与えた影響について」, 第54回外国語教育メディア学会全国研究大会, 2014.08.05, 福岡大学(福岡県・福岡市).

Furumura, Y., “Using the ICC Forum to connect domestic students with foreign students and cultures”, 17th Cultnet Seminar Durham, 2014.04.27, Durham University, Durham (UK).

Furumura, Y., “Computer -Mediated Communication between Chinese and Japanese Students”, The 19th International Conference of the International Association for Intercultural Communication Studies (IAICS), 2013. 10.03, Far Eastern Federal University, Vladivostok (Russian Federation).

Furumura, Y. & Nakano, H., “The effects of topics on the development of ‘Critical Cultural Awareness’ in intercultural communication using the ICC Forum: Chat, PPT presentation, and movies exchanged by Japanese and non-Japanese students”, EUROCALL 2013, 2013.09.11, University of Evora, Evora (Portugal).

Furumura, Y., “The impact of study-abroad on students’ attitude and knowledge as well as English proficiency”, The 52nd JACET International Convention 2013, 2013.08.31, Kyoto University (京都府・京都市).

Houghton, S.A., “Stimulating the curiosity of Japanese students in study abroad: materials and methods”, The 2013 International Conference Innovation in Teaching Language and Cultures, 2013.07.18, The Institute of

Language, Art and Culture. Suan Dusit Rajabhat University, Bangkok (Thailand).

Furumura, Y., “The report on Computer Mediated Communication with foreign students: Intercultural Communication Forum”, WorldCALL 2013, 2013.07.13, Glasgow (UK).

古村由美子, 「フォーラムサイトを活用したコミュニケーション活動について: 国際化推進を目的として」, 第43回(2013年度)外国語教育メディア学会九州・沖縄支部研究大会, 2013.06.08, 西南学院大学(福岡県・福岡市).

Yamada, E., “The process from critical cultural awareness to global citizenship”, Intercultural Competence and Interaction, 2012.12.16, Shanghai Normal University, Shanghai (China).

Furumura, Y., “What made students get curious about foreign countries?”, The Fifth CLS International conference (CLaSIC 2012), 2012.12.08, The National University of Singapore, Kent Ridge (Singapore).

Nakano, H., “English Writing and Presentation Using ‘Web-English’”, International Conference ICT for Language Learning, 2012.11.15, Florence (Italy).

Houghton, S., “Competing values and multiple selves: Making identity-development visible for assessment purposes in foreign language education”, 45th Annual Meeting of the British Association for Applied Linguistics, 2012.09.08, University of Southampton, Southampton (UK).

Furumura, Y., “How have images of a foreign culture and people living there changed during and after studying abroad?: From the perspective of ‘Critical Cultural Awareness’”, The 18th International Association for Intercultural Communication Studies (IAICS), 2012.06.11, Yuan Se University, Chung-Li (Taiwan).

〔図書〕(計1件)

Furumura, Y., Cambridge Scholars Publishing, Remedying negative stereotypes through identifying the origins of stereotypes: From semantic or affective learning? In S. Houghton, Y. Furumura, M. Lebedko, & L. Song (eds.), *Developing critical cultural awareness: Managing stereotypes in intercultural (language) education*,

〔産業財産権〕

出願状況（計0件）

取得状況（計0件）

〔その他〕

6. 研究組織

(1) 研究代表者

古村 由美子 (FURUMURA, Yumiko)

長崎大学・経済学部・教授

研究者番号：30336036

(2) 研究分担者

ホートン ステファニー

(HOUGHTON, Stephanie)

佐賀大学・文化教育学部・准教授

研究者番号：00382416

中野 秀子 (NAKANO, Hideko)

九州女子大学・共通教育機構・教授

研究者番号：20309735

山田 悦子 (YAMADA, Etsuko)

北海道大学：留学生センター・准教授

研究者番号：70600659